

場合は機体速度を下げることも有効である。

### ⑧ 散布装置の特性を把握する

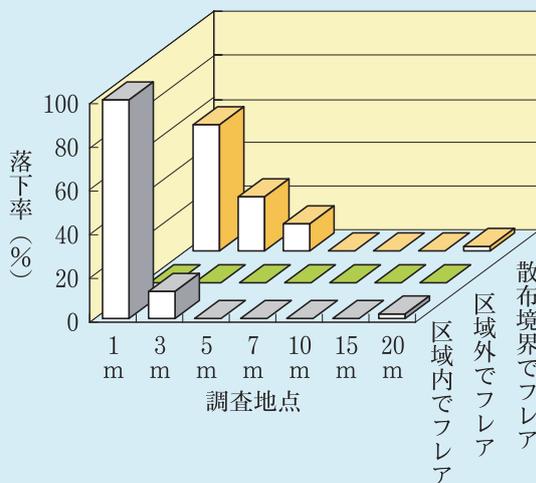
加圧型ノズルは吐出量を多くすることにより吐出圧力が上がり、噴霧粒子径が小さくなる傾向にある。これに対してロータリーアトマイザーは吐出量を少なくすると粒子径が小さくなる傾向にある。手動あるいは速度連動による調整でも散布基準を逸脱すると微細粒子の発生を助長することができるので注意する。

### ⑨ 気象観測の徹底

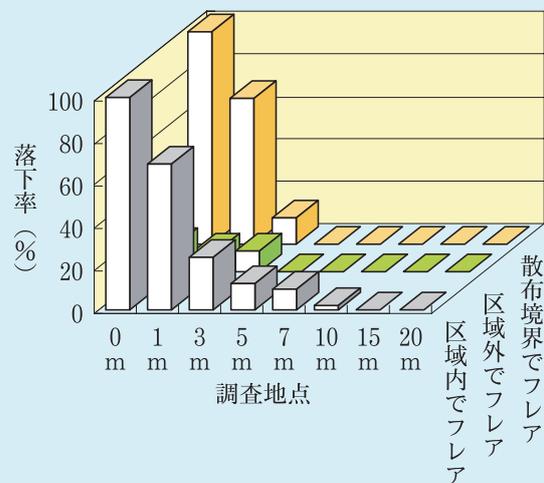
実施主体、散布者はともに気象条件（風向・風速）を記録し、一定期間保管する。

#### ◆フレアによる飛散

減速後のフレア（機体引き起こし）操作と飛散の違いを3パターン示した。



フレア操作後の飛行方向へのドリフト  
(農林水産航空協会, 2005)



フレア操作後の横方向へのドリフト  
(農林水産航空協会, 2005)

- ① 散布区域内でフレア：散布境界3m～5m手前の散布区域内で散布を停止し、直ちにフレア操作を行い横移動
- ② 散布区域外でフレア：散布境界3m～5m手前の散布区域内で散布を停止し、散布境界を通過し3m経過してフレア操作を行い横移動
- ③ 散布境界でフレア：散布を停止せず、散布境界でフレア操作を行い横移動

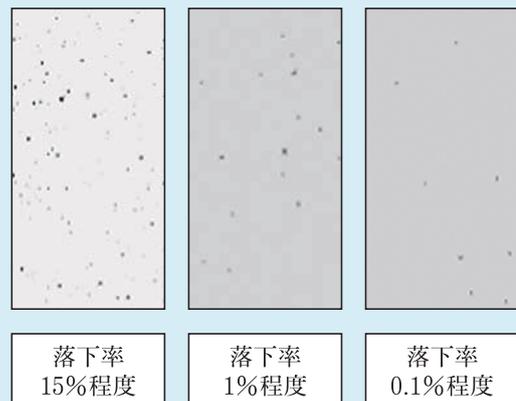
この調査では、散布しながらフレアを行った場合、飛散の程度が大きいことが見られた。散布を停止した後フレアを行った場合では、フレアのタイミングで飛散の程度が異なった。また、横方向への飛散程度は、飛行の進行方向よりも高くなる場合も認められた。これらのことから、他作物が栽培されているほ場周辺の散布は、必ず散布を停止してからフレアを行うこと、また、他作物栽培ほ場へ向けての散布では、フレアのタイミングが繊細に求められるので、近接する境界付近は散布ほ場内で数回の平行散布を行い、枕地を取ってから散布を行うことが望ましいと考えられた。

なお、このような散布場面では散布実施基準の範囲で「速度を下げ」、フレア操作は極力抑えることに努める。

#### ◆調査紙上で見る落下程度

図は、農薬の落下率（ドリフト率）を調査紙の付着程度で示したものである。

落下程度の目安については、調査紙の種類、農薬の種類によって異なることがある。



(農林水産航空協会, 2005)

この調査では、調査紙上で落下粒子の付着が見られなかった場合は、おおむね落下率が0.1%未満で、明らかに落下粒子が見られた場合では落下率が1%以上であった。

### 3. 低飛散型の新しい散布装置の活用

無人ヘリに搭載されているこれまでの散布装置でも、その散布操作に十分留意すれば飛散低減を行うことができるが、より確実な飛散低減対策を行うため、最近新しい散布装置が実用化された。この新散布装置は現在稼動中の機体にも取り付けることができるので、一層の飛散対策のために積極的に活用したい。(詳細は販売会社に問い合わせること)



- 写真は実飛行時の薬剤の流れ
- 青線はコンピューター解析による薬剤の流線

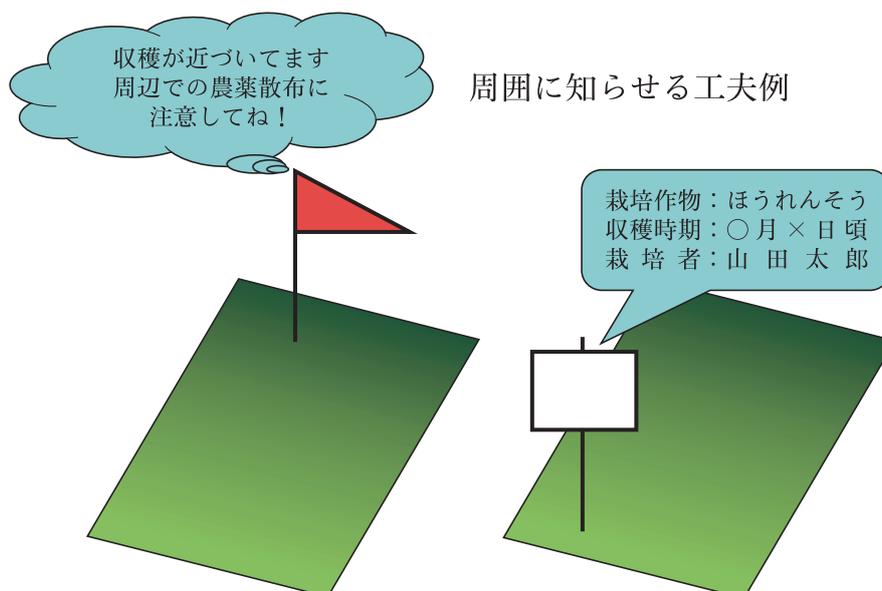
## 7. 散布者同士の連携

近接しあう生産者同士が相互に飛散リスクを認識しあうことは、飛散による不慮の農薬残留の回避に役立つ。第Ⅱ章 16 ページの“特別な経費をかけない基本的な対策”に示す「近接作物の収穫を待ってから散布する」あるいは「散布区域に近接したエリアからの収穫を止める、又は1週間程度遅らせる」という対応を行ううえで、それぞれの生産者同士の連携は不可欠でもある。また、「5. 少量多品目栽培圃場や混植園での対策」に示したように、異なる生産者を含む単位で作付け計画や時期を調整する必要が生じた時も同様である。

地域によっては、指導機関が管内の栽培マップを作成し、危険エリアの判断やその対策についての啓発や調整を行っている場合もある。ヘリ散布のように地域ぐるみで防除を行う場合も同様である。こうした連携によって、事前にリスク回避の検討が行われることは、極めて有効な対策である。

一方、兼業化がすすむ中でなかなか近接した生産者同士が緊密に連携できない、請負防除の増加によって関係者が複雑化している、家庭菜園の増加で農薬使用者が分からないケースが増えている、といった悩みも多く、相互の連携がはかれない場合も多い。

こうした中、幾つかの地区では、収穫が近づいた栽培圃場に「目印旗」をたてることで、近隣のエリアで農薬を散布する者に注意を喚起している事例がある。導入している地区によると、管内生産者に対し、「収穫前2週間になったらほ場の四隅に小旗をたてる」「収穫予定時期を明記した看板を栽培期間中たてておく」といった方法を要請している。一方、注意喚起はしたものの周囲の農薬散布がどのように配慮されたのかが確認できない、といった問題も指摘されている。



## 8. 農薬の剤型や登録内容

農薬には様々な剤型があり、飛散しにくい剤型や施用法もある。また、飛散を受けた作物に農薬登録されているような農薬の場合、多少飛散しても実質的な問題は生じない。このように、使用する農薬から飛散対策を講じることもできる。いずれにおいても、目的とする作物や病害虫に登録のある農薬の中から選定することになるので、用途によってはそうした選択肢が十分得られないことも考慮しておく必要がある。

### 1. 飛散しにくい剤型

飛散しにくい剤型には、ジャンボ剤、粒剤、細粒剤、微粒剤といった固形剤のほかに、フロアブルの手ふり散布がある。これらはいずれも液剤に比べて飛散しにくい特性を有しているが、注意が必要なのはその散布方法であり、動力散布機を用いて噴頭を無造作にふりまわしたり、風の強い条件下で散布すれば、飛散しやすくなるのは当然である。このため、これらの剤型であっても基本的な散布操作に留意しなければならない。

風速 3 m/s 未満の条件での粒剤のドリフト

| 散布方法   | 散布時風速 (m/s) | 距離別のドリフト率 (%) |       |     |      |      |      |     |
|--------|-------------|---------------|-------|-----|------|------|------|-----|
|        |             | 1 m           | 2.5 m | 5 m | 10 m | 15 m | 20 m |     |
| 散粒器    | (1キロ粒剤)     | 2.2           | 41.2  | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|        | (3キロ粒剤)     | 2.3           | 0.0   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| 拡散噴頭   | (1キロ粒剤)     | 2.0           | 1.1   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| ホース    | (1キロ粒剤)     | 0.0           | 0.0   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|        |             | 0.0           | 0.9   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|        |             | 1.0           | 10.2  | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|        | (3キロ粒剤)     | 1.0           | 19.8  | 0.9 | 0.05 | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| フロアブル  |             | 0.5           | 0.0   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| 塊型ジャンボ |             | 1.0           | 0.0   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| 袋型ジャンボ |             | 1.0           | 0.0   | 0.0 | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |

風速 3~4 m/s 条件での粒剤のドリフト

| 散布方法        | 散布時風速 (m/s) | 距離別のドリフト率 (%) |       |      |      |      |      |     |
|-------------|-------------|---------------|-------|------|------|------|------|-----|
|             |             | 1 m           | 2.5 m | 5 m  | 10 m | 15 m | 20 m |     |
| 拡散噴頭        | (1キロ粒剤)     | 3.5           | 16.0  | 3.7  | 0.6  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|             | (3キロ粒剤)     | 3.0           | 15.8  | 3.7  | 0.1  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| 短稈噴頭        | (1kg 粒剤)    | 3.4           | 0.0   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|             |             |               | 28.5  | 13.1 | 6.2  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|             |             | 3.0           | 31.8  | 18.3 | 4.9  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|             | 3.0         | 37.5          | 15.0  | 4.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  |     |
|             | (3kg 粒剤)    | 3.3           | 1.0   | 0.3  | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|             |             | 238           | 173   | 8.5  | 0.0  | 0.0  | 0.0  |     |
|             |             | 4.0           | 52.4  | 22.2 | 0.3  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| ホース (1キロ粒剤) |             | 2.8           | 36.6  | 0.9  | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| 塊型ジャンボ      |             | 3.2           | 0.0   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
| 袋型ジャンボ      |             | 3.5           | 0.0   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |

強風条件での粒剤のドリフト

| 散布方法        | 散布時風速 (m/s) | 距離別のドリフト率 (%) |       |      |      |      |      |     |
|-------------|-------------|---------------|-------|------|------|------|------|-----|
|             |             | 1 m           | 2.5 m | 5 m  | 10 m | 15 m | 20 m |     |
| 短稈噴頭        | (1kg 粒剤)    | 4.7           | 41.7  | 21.6 | 3.2  | 0.0  | 0.0  | 0.0 |
|             |             | 7.0           | 61.2  | 42.3 | 34.7 | 10.7 | 0.2  | 0.0 |
|             | (3kg 粒剤)    | 5.6           | 110   | 97.4 | 71.3 | 15.3 | 0.3  | 0.0 |
| ホース (1キロ粒剤) | 5.5         | 0.2           | 0.0   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  |     |
|             | 6.0         | 19.6          | 0.6   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  |     |
| 塊型ジャンボ      |             | 6.0           | 0.0   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  |     |
| 袋型ジャンボ      |             | 6.0           | 0.0   | 0.0  | 0.0  | 0.0  | 0.0  |     |

(日本植物調節剤研究協会 2004)

#### ◆細粒剤の飛散特性

風速 3 m/s 以上のやや風が強い条件下で細粒剤の飛散を調査した結果では、同じ条件で散布した粒剤と同等であり、2.5 m 以遠に飛散することはまずないと考えられている。(日植調 2006 (文献 4))

#### ◆微粒剤の飛散特性

粉剤対策の項を参照。

## 2. 飛散しても問題が生じにくい農薬

第 I 章で述べたとおり、飛散に伴う問題点は幾つかあるため、どのような問題回避を目的にするかによって選択の基準が変わってくる。例えば、ミツバチへの危被害防止が目的であれば、ミツバチへの影響が小さい農薬を選ぶことになる。こうした基本的情報は農薬のラベル表示や指導機関から得られる場合が多い。ここでは近隣作物への影響回避の目的でどのような農薬選択が有効かを解説する。

### (1) 近隣作物にも登録がある農薬

使用しようとする農薬が近隣作物にも登録があれば、近隣作物に飛散した場合でも通常は問題は生じない。この登録の有無は農薬のラベルによって容易に確認することができる。ただし、購入後に新たな作物が追加登録されている場合や、類似の作物をグループとして一括表示している場合があり、このような場合にはラベルの表示内容だけでは十分確認できないため、必要に応じてメーカーや指導機関に問い合わせるとよい。

なお、近隣作物に登録があるからといって大量に飛散させても何ら問題にならないということではない。希に小さい基準値しか設定されていない場合もあるため、できるだけ飛散させないように心がけるようにしたい。

### (2) 近隣作物に登録はないが残留基準が設定されている農薬

農薬は国際商品であるため、国内では登録がなくとも、海外で登録がある等により作物に残留基準値が設定されている場合もある。Web 上で残留基準値の検索ができるデータベースがいくつかあるので、それらから情報を得ることができるが、このカテゴリーに属する農薬と作物の組み合わせはそれほど多くない。

### (3) 近隣作物の残留性が問われない農薬

天敵や微生物農薬といった生物農薬は作物の残留性は問題とならない。また、農薬であってもいわゆる化学合成農薬以外のものの多くは、残留基準の規制対象外となっているため、近隣作物に飛散しても問題とはならない。このような農薬には無機銅剤や食品添加物を成分とするもの等があるが、有機栽培で使用が認められている農薬がこれに該当する。

#### ◆農薬選定の限界

問題になりにくい農薬の選定を基本に様々なケースについて防除プログラムを構築することは、全体としてはかなり難しい。基準値とは無縁の農薬は効果の点で不十分になりやすく、基準値設定が広範囲に及ぶ農薬の種類は限られるからである。地域における農薬の選定には、効果、コスト、環境保全あるいはIPMといった幾つもの観点が含まれていることを踏まえれば、基準値の設定状況のみから安易に農薬を選定していくことは望ましいことではない。代替農薬として無理なく利用できる候補剤の中から採用を考えていくようにしたい。

#### ◆残留基準値の設定状況

殺菌剤や殺虫剤の場合、用途ごとにその基準値設定状況には特徴がある。例えば、水稻が主用途である農薬の場合、水稻以外の作物に対する基準値設定は一般に少ない傾向にある。殺ダニ剤も登録作物以外の基準値設定は少ないものが多い。上市されて間もない新しい農薬の場合も、基準値の拡充は適用拡大とともに行われていくため、基準値の設定は限定的になりがちである。これとは反対に、古くから様々な用途で使用されてきた農薬では、基準値はより多く設定されている。しかし、部分的に基準値が空白となっているものも多いので、精査が必要である。近年、残留基準値の見直しが大規模にすすめられており、これまで基準があった作物に一律基準（0.01 ppm）が適用されるケースも増えているので注意が必要である。

#### ◆登録拡大対応の困難化

登録拡大には必要なデータ作成と登録認可に多大な費用と時間がかかることから、農薬企業サイドでは、近接作物への基準値設定を理由にした登録拡大をすすめるのは容易ではない。さらに、近年登録取得のための残留試験の大幅な拡充が求められており、その対応が一層難しくなっている。

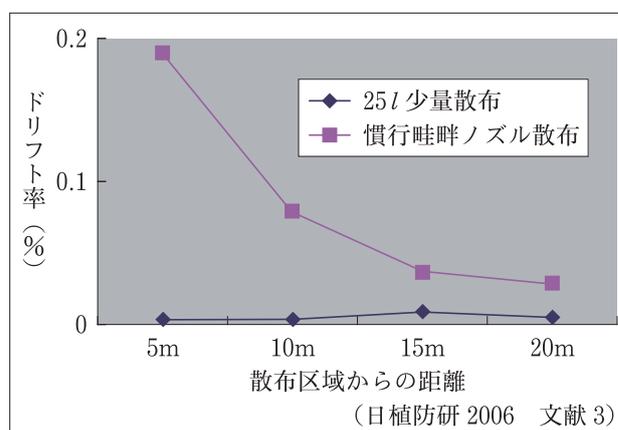
## 9. 飛散の少ない散布機の利用

### 1. 水田防除に利用できる低飛散型散布機

近年、水田・畑作内を走行しながらブームによる液剤散布が可能な乗用管理機が数社から供給されている。これら乗用管理機の水田用途は慣行散布だけでなく10a当たり25lの少量散布が使用できるものがあり、それらには少量散布専用の飛散低減型ノズルが装備されている。

これまで行われた調査では、飛散低減ノズルを装着した乗用管理機で25l/10aの少量散布を行うと、飛散が極めて少ないことが明らかとなっており、現時点ではあらゆる液剤散布法の中で最も飛散が少ない技術である。一方、乗用管理機で慣行ノズルによって慣行散布を行った場合は一定の飛散が発生するが、作物に近接した位置で散布するという特徴から、畦畔ノズルなどに比べれば飛散は少ないのではないかと考えられる。

乗用管理機は、こうした低飛散性以外にも一人で快適に防除が行えるという点で優れているが、高価であるため水田ではなかなか普及がすすんでこなかった。しかし、最近一部のメーカーから廉価版が発表されている。



### 2. 小規模な畑地で利用できる低飛散型散布機

液剤散布は様々な分野に用いられており、その有力な飛散対策として飛散低減ノズルがあるが、慣れ親しんだ慣行ノズルからの転換に抵抗感をもつ生産者も少なくない。このため、慣行ノズルにフードを取り付けて周囲への飛散を防止する散布器具やオプションがいくつか開発されている。



写真提供：みのる産業株式会社

うち、手押し的小型ブームスプレーヤに全体をすっぽり覆うカバーを取り付けた製品は、高い飛散低減効果があるものと考えられる。類似の製品は茶の散布ノズルでもいくつかある。

### 3. 低飛散型スピードスプレーヤ

欧米では樹種や樹型にあわせ様々な構造を有するSSが普及しているが、我が国では画一的な製品しか供給されてこなかった。最近になってこれを見直す機運がでてきており、もともと少ない送風しか要らない棚づくり果樹向けに、全く新しい散布構造をもつ散布機が研究されている。この散布機はブーム状のノズルで棚面に広がる枝葉に近接した位置から散布する構造を有しており、送風量は極めて少なくすむ。このため、飛散が極めて少ないだけでなく、SS特有の騒音も少なく、混住地区でのなしやぶどう産地への普及が期待されている。



開発中の低飛散型SS（生研センター提供）

画一的な構造のSSしか供給されなかった理由のひとつは、我が国の果樹栽培における栽植密度や樹型の仕立てが多様で、いずれにも使用できるような最大公約数的な構造が求められてきた点にある。従って、今後棚づくり果樹以外でもこれら低飛散型のSSの開発を促すためには、これまでの栽培管理方法を部分的に見直し統一化をはかるなど、新しい構造を有するSSを積極的に活用する環境づくりをすすめていくことが不可欠であろう。

#### ◆ 静電ノズルは飛散対策に有効か？

静電散布は、散布粒子を帯電させて作物への付着量を高める目的で開発された技術で、当初は高い付着効率を得るために濃厚少量散布が基本とされていたが、その後慣行散布を対象とした技術開発がすすめられ、野菜等の手散布ノズルとして現在は数社から市販されている。本ノズルはその特徴から飛散低減にも有効ではないかとの意見があり、一部ではその調査も行われている模様であるが、詳細は明らかにされていない。

最近行われた調査結果（日植防研2008（文献7））では、静電散布は近距离の範囲で落下付着量が増え、風がある条件下では、風速の強弱にかかわらず、静電付加しなかった場合よりも風下での落下付着量が増加する傾向であった。これに対し一般的な飛散低減ノズルは風下での落下付着量は極めて少なかった。これは、帯電効率を得るために飛散しやすい微細な噴霧粒子を用いていることに加え、こうした帯電粒子は、風によって大気中に拡散したのち、多くが霧散せずに風下に落下するためと考えられる。このことから、静電ノズルを飛散低減対策として用いることは逆効果になるおそれがあると考えられる。



## 10. その他の対策

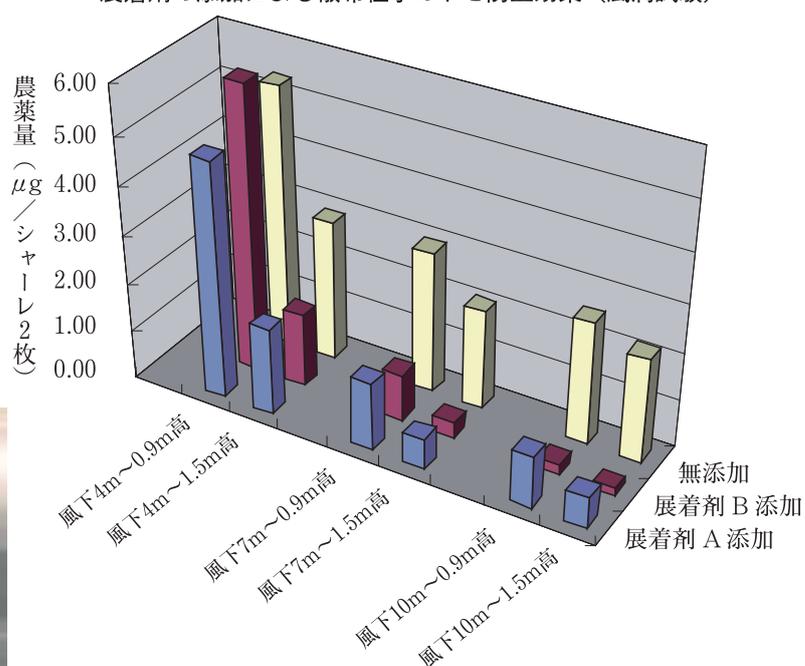
飛散による問題回避のために役立つのではないかと考えられてきた対策は、これまで解説した以外にも幾つかある。例えば、飛散を受けてしまった作物をすみやかに水洗すれば、ある程度付着した農薬を除去することができる。光触媒で付着した農薬の分解を促進するアイデアも示されている。これらはいずれもある程度の効果はあるが安定的なものではないため、安心して利用できる積極的な対策にはなりにくい。

一方、飛散対策の基本である「飛散そのものの低減」に役立つ技術は、これまで解説したもの以外にこれというものはないが、展着剤が有効なのではないかとの指摘もある。

ノズルから噴霧された粒子は、大気中を移動する間に「やせ」が生じ、より飛散しやすい微細な粒子に変化するといわれている。こうした現象は低湿度条件で実験的に確認されているが、とりわけスピードスプレーヤのように大気中の移動距離が大きい散布法の場合、湿度や直射日光の影響をより受けやすいのではないかと考えられている。このような飛散助長要因について、有人ヘリ分野では特殊な展着剤によって粒子のやせを防止する技術があり、欧米でも類似のアジュバントが存在している。これらはいずれも少量散布における技術であるが、一部では慣行防除にも応用できるのではないかと考えられている。

これについて2008年に当協会が調査を行ったところ、ヘリ分野で使用される特殊な展着剤はその粘性から慣行防除には使用困難であったが、一般的な展着剤は一定のやせ防止効果がある可能性が示唆された。ただし、このやせ防止効果によってどの程度の飛散低減効果が期待できるのかは、現時点では明らかでない。

展着剤の添加による散布粒子のやせ防止効果（風洞試験）



(日植防研 2008 文献 7)

## 11. 感水紙を用いた飛散の量的評価法

感水紙は水滴が付着すると変色することから、液剤散布による飛散実態を把握するうえで便利なツールである（第Ⅱ章を参照）。感水紙は農業者でも入手可能であるが、高価であることから、これまでは主に指導機関や企業の関係者が調査研究目的での使用や研修会のデモンストレーション等に利用してきた。感水紙で検出された水滴パターンをもとに、飛散した農薬量を推定したり、作物の残留濃度が推定できれば、その応用範囲はさらに拡大し、飛散による周辺作物リスクの判定に一層活用できる可能性がある。そこでこれらに関する最近の研究報告を紹介する。感水紙上に現れる付着パターンには極めて多くの要因が関係することが分かってきており、ここで紹介する推定法もその再現性が十分確認されているものではない。このため、あくまで参考としての利用にとどめるべきである。

なお、感水紙以外に飛散した水滴を感度よく検出できる身近な素材がないかも検討されているが、実用的なものは見出されていない。

（感水紙の入手等は <http://www.spray.co.jp/products/kansuishi01.html> を参照）

### 1. 感水紙の付着パターンから落下農薬量を推定する方法

これまでの調査から、感水紙上に現れた水滴痕の面積と落下農薬量には相関があることが分かっている。一方、付着面積率が同等であっても農薬量がかなり異なることもある。これには多くの要因が考えられるが、とくに散布ノズルの種類と環境条件を考慮しておきたい。湿度が低い乾燥条件の場合に散布粒子の「やせ細り」が起きると考えられているためである。実際の農薬量推定に当たってもうひとつ重要なのは、用いる農薬の有効成分濃度がまちまちなため、それを考慮しなければならないことである。これらを考慮した推定法の一例として、以下の方法が報告されている。（文献5）

**STEP 1:** 画像解析ソフトで被覆面積率（%）を求める

推奨できるソフト:

① まい A のーど (<http://www.nozzle-network.co.jp/drift/myAnodo.html>)

② 感水紙専用画像処理ソフト

([http://brain.naro.affrc.go.jp/iam/News/iam\\_news54.htm#5305](http://brain.naro.affrc.go.jp/iam/News/iam_news54.htm#5305) 参照)\*

\* 利用希望者は生研センター企画部企画第2課（Tel:048-654-7000(代)）に問い合わせること（公的機関には無償で提供可）

**STEP 2:** 次式により 100 ppm 薬液の場合の農薬落下量（mg/m<sup>2</sup>）を求める

慣行ノズル・低湿度条件の時: 被覆面積率(%)×0.0255－0.0022

慣行ノズル・高湿度条件の時: 被覆面積率(%)×0.0116－0.0025

低減ノズル・低湿度条件の時: 被覆面積率(%)×0.0326＋0.0012

低減ノズル・高湿度条件の時: 被覆面積率(%)×0.0193－0.0007

### STEP 3: 散布された農薬の薬液濃度を求める

$$\text{薬液濃度(ppm)} = \text{有効成分含有率(\%)} \div \text{希釈倍率(倍)} \times 10,000$$

### STEP 4: 農薬落下量 (mg/m<sup>2</sup>) を求める

$$\text{農薬落下量(mg/m}^2\text{)} = \text{STEP 2 農薬落下量} \times \text{STEP 3 薬液濃度} \times 1/100$$

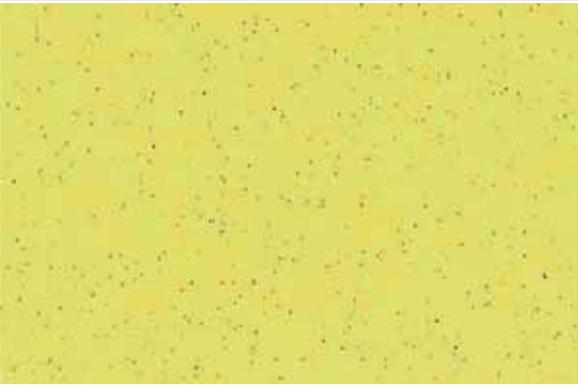
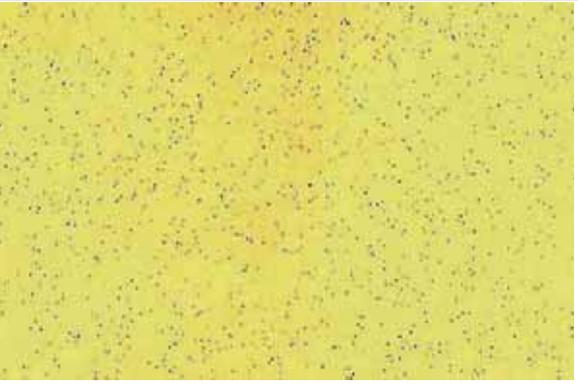
#### ◆より簡便な推定方法

58 ページ～62 ページに掲げた感水紙の代表的な付着パターンに照らし合わせることで、およその被覆面積率と 100 ppm 換算の農薬落下量 (mg/m<sup>2</sup>) を知ることができる。次に実際に散布された農薬の薬液濃度を上記 STEP 3 により求め、それが 50 ppm であった時には 1/2 倍し、200 ppm であった時には 2 倍して実際の農薬落下量を求める。

#### 【注意】

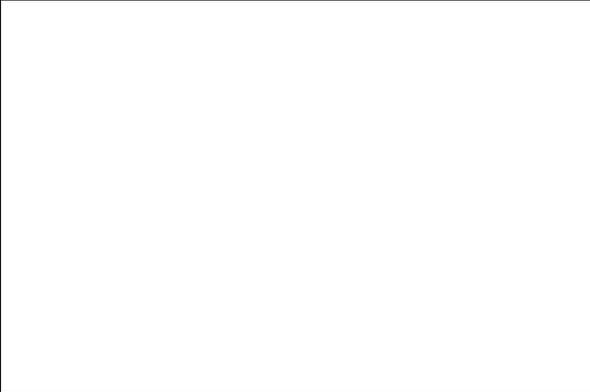
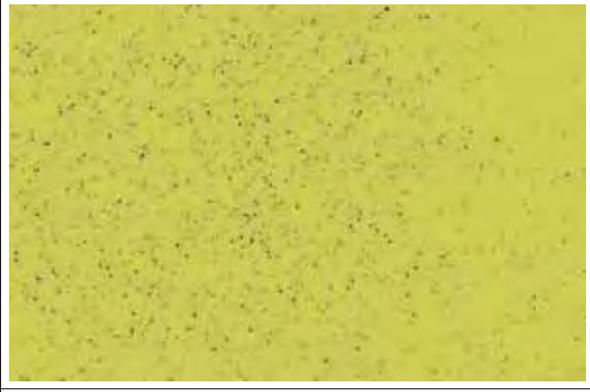
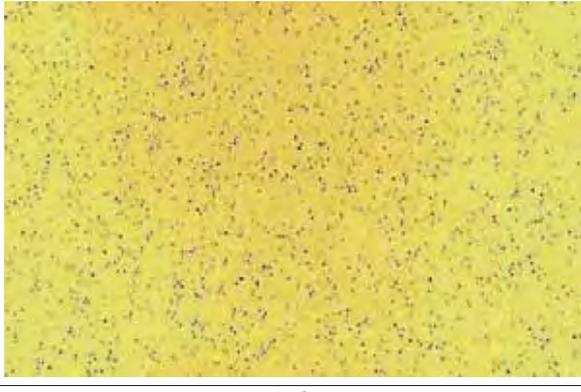
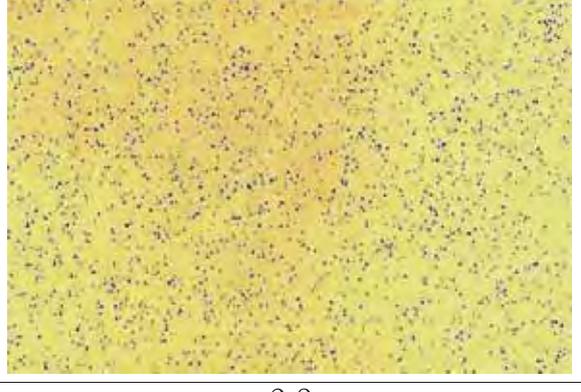
- 被覆面積率が 10% を超えるような場合（感水紙に極めて多くの水滴が付着する状態）は上の推定式は利用できない。
- 湿度条件によって感水紙上の付着状態が異なるのは、散布粒子がやせる現象によると考えられる。散布される粒子の大きさ・ばらつき程度はノズルの特性、使用条件によって異なるので、上記推定はあくまで目安として用いることが適当である。
- 飛散による農薬落下は調べる場所によって大きく異なるため、1 カ所の感水紙のみから全体を判断することは避けるべきである。

### 感水紙の付着パターン（その1）

|          |   |  |
|----------|---|--|
| 低湿度・微細粒子 |    |    |
|          | 0.5<br>0.011  | 1.0<br>0.023   |
| 高湿度・微細粒子 | <div data-bbox="359 658 764 741" style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">                     感水紙上では極めて微細な飛散粒子が認められている。                 </div>  |    |
|          |   | 0.9<br>0.008   |
| 低湿度・粗大粒子 |    |  |
|          | 0.5<br>0.018  | 1.0<br>0.034   |
| 高湿度・粗大粒子 |    |  |
|          | 0.5<br>0.009  | 0.8<br>0.015   |

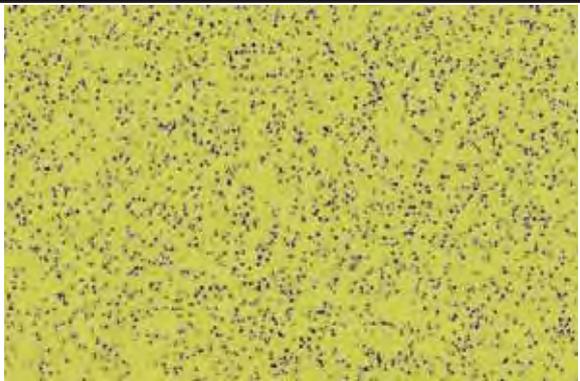
注) 印刷画像のため実際のイメージとやや異なる場合もある。各欄の数値は、上段が被覆面積率(％、まいAのーど使用)、下段が100ppmの農薬の場合の推定落下成分量(mg/m<sup>2</sup>)を示す。

## 感水紙の付着パターン（その2）

|          |   |  |
|----------|---|--|
| 低湿度・微細粒子 |    |    |
|          |   | 1.9  |
|          |   | 0.046  |
| 高湿度・微細粒子 |    |    |
|          | 1.6   | 2.2  |
|          | 0.016   | 0.023  |
| 低湿度・粗大粒子 |  |  |
|          | 1.4   | 1.9  |
|          | 0.047   | 0.063  |
| 高湿度・粗大粒子 |  |  |
|          | 1.7   | 2.3  |
|          | 0.032   | 0.044  |

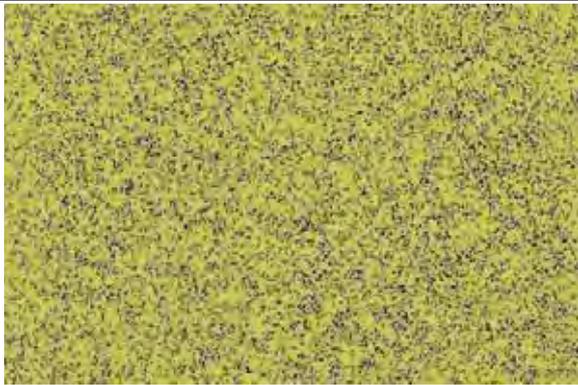
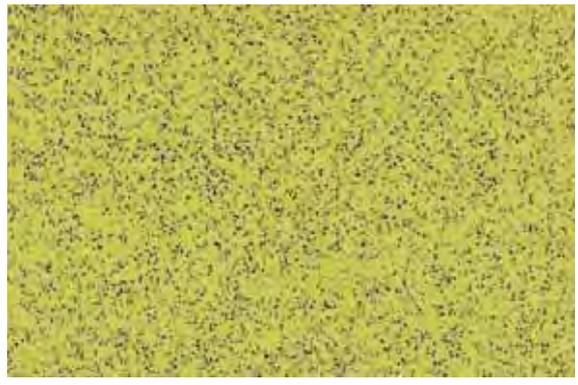
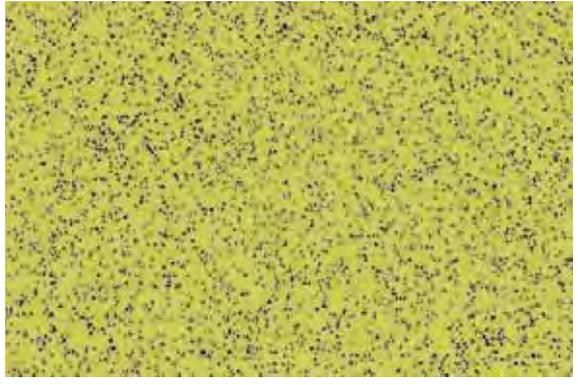
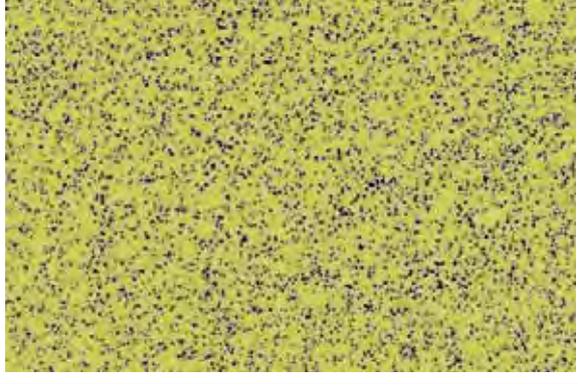
注) 印刷画像のため実際のイメージとやや異なる場合もある。各欄の数値は、上段が被覆面積率(％、まいAのーど使用)、下段が100ppmの農薬の場合の推定落下成分量(mg/m<sup>2</sup>)を示す。

### 感水紙の付着パターン（その3）

|          |   |  |
|----------|---|--|
| 低湿度・微細粒子 |    |  |
|          | 2.5   |  |
|          | 0.062   |  |
| 高湿度・微細粒子 |    |    |
|          | 2.8   | 3.8  |
|          | 0.030   | 0.042  |
| 低湿度・粗大粒子 |  |  |
|          | 2.8   |  |
|          | 0.092   |  |
| 高湿度・粗大粒子 |  |  |
|          | 2.7   | 4.0  |
|          | 0.051   | 0.077  |

注) 印刷画像のため実際のイメージとやや異なる場合もある。各欄の数値は、上段が被覆面積率(％、まいAのーど使用)、下段が100ppmの農薬の場合の推定落下成分量(mg/m<sup>2</sup>)を示す。

### 感水紙の付着パターン（その4）

|          |   |  |
|----------|---|--|
| 低湿度・微細粒子 |    |    |
|          | 4.8<br>0.120  | 7.6<br>0.192   |
| 高湿度・微細粒子 |    |  |
|          | 4.7<br>0.052  |  |
| 低湿度・粗大粒子 |  |  |
|          | 4.7<br>0.154  | 8.0<br>0.262   |
| 高湿度・粗大粒子 |   |  |
|          |   | 6.7<br>0.129   |

注) 印刷画像のため実際のイメージとやや異なる場合もある。各欄の数値は、上段が被覆面積率(％、まいAの一ど使用)、下段が100ppmの農薬の場合の推定落下成分量(mg/m<sup>2</sup>)を示す。